

かぜ薬		分類・成分名	特徴	
熱と痛み	アニリン系	アセトアミノフェン	市販の風邪薬にもっとも多く含まれる鎮痛解熱剤。視床下部に直接作用して、皮膚血管を拡張し、熱放散を増大して体温を下降させる。また、中枢性の鎮痛作用がある。常用量では抗炎症作用はほとんどない。小児にも使用できる。インフルエンザでの使用に唯一問題がない解熱鎮痛薬。	
	NSAID	イブプロフェン	抗炎症効果を併せ持つ。	
	ピリン系	イソプロピルアンチピリン	抗炎症作用は弱い。強い解熱鎮痛効果をもつ。	
鎮痛補助	中枢神経興奮薬	無水カフェイン	自律神経興奮による脳細動脈収縮作用で血管性の頭痛を鎮める。過剰摂取または常用者が中止するとリバウンドで頭痛を引き起こすこともある。配合剤による眠気を緩和するという製品もあるが、実際の効果には疑問あり。	
鼻水止め	抗ヒスタミン薬	クロルフェニラミンマレイン酸塩など	ヒスタミンH1受容体に結合してヒスタミンと拮抗し、くしゃみ、鼻水、涙目などの症状を抑える。鼻づまりへの効果は弱い。DI体は眠気が少ない。	
	副交感神経遮断薬	ヨウ化イソプロパミド ペラドンナ総アルカロイド	抗コリン作用に基づく外分泌抑制作用により鼻水などの症状を抑える	
鼻づまり	血管収縮薬(α刺激薬)	塩酸プソイドエフェドリン	α1刺激作用に基づく血管収縮作用により、鼻粘膜の充血を抑え、鼻づまりを改善する。効果が強い。覚醒作用(覚醒剤の原料にもなる)があるため、塩酸フェニレフリンに転換する動きが広がっている。日本では脳出血事例のあった塩酸フェニルプロパノールアミン(ダン・リッチ等)の代替としてOTCの鼻炎薬に配合されている。	
咳と痰	気管支拡張薬(交感神経興奮薬)	dl-メチルエフェドリン塩酸塩	脳の咳中枢に作用して咳を止めるとともに、β2刺激作用に基づく気管支拡張作用により、鎮咳・去痰作用を示す。また、アレルギーを抑える作用もある。エフェドリンに比べて血管や心臓に対する作用(β1刺激作用)が弱く、血圧上昇や不整脈の副作用が少なくなっている	
	鎮咳薬(中枢性)	麻薬性	ジヒドロコデインリン酸塩	アヘンアルカロイドの誘導体で、延髄の呼吸中枢を抑制することによって咳を止めるが、胃腸をはじめカラダの必要な機能をいろいろ麻痺させてしまう。依存性あり。
		非麻薬性	ノスカピン	のどや気管支の刺激の反射をおさえて鎮咳作用を示す。空咳に向いている。デキストロメトルファン臭化水素酸塩水和物は医療用のメジコン。
			グアイフェネシン	気道粘膜からの分泌を促進して痰の粘調度を低下させ、去痰作用を示す。また、中枢性の鎮咳作用も持っている。去痰作用をあわせ持つ非麻薬性中枢性鎮咳薬。
去痰薬	ブロムヘキシン塩酸塩		医療用のピソルボン。気道分泌促進作用、気道粘液溶解作用などにより、去痰作用を示す	
	塩酸アンブロキシソール		医療用のムコソルバン。肺表面活性物質(肺サーファクタント)を増やし、気道粘膜の“すべり”をよくする。また、うすい粘液の分泌を増やして痰の粘りを取り、さらに線毛運動を活発にして排出を助ける。	
抗炎症薬	消炎酵素	リゾチーム塩酸塩	医療用のノイチーム。膿粘液を分解することにより、鼻水や痰を排出しやすくする。また、炎症を生じた組織の修復を促進する。	
	抗プラスミン薬	トラネキサム酸	医療用のトランサミン。プラスミンによるブラジキニンなどの起炎物質の産生を抑制する。喉の腫れや痛みを緩和する目的で配合される。止血作用がある。	

副作用
SJSの報告あり。飲酒の多い人が常用すると肝障害のリスクが高い
SJS・Lyell症候群の報告有。胃が荒れやすい
ピリン疹。SJSの報告あり
中枢神経興奮作用
中枢神経抑制による眠気と抗コリン作用
抗コリン作用による諸症状
交感神経興奮作用による諸症状(排尿困難、血圧上昇、心悸・甲状腺機能の亢進、血糖値上昇、眼圧上昇、不眠、神経過敏・等)
中枢神経興奮による不眠、動悸、食欲不振、頭痛、発疹などの過敏症状
咳とともに呼吸を抑制する。気道分泌を抑制するため痰の排出が困難になる。便秘が高頻度に出る。眠気あり。
特に目立つ副作用はない。気道分泌を抑制しない。呼吸中枢刺激作用を有するが、鎮痛、鎮静作用はなく、耐性の発現や依存性もない。
特にはない
SJSの報告あり
SJS、Lyell症候群の報告あり
特にはない

留意すべき事項	
喘息の有無の確認が必要。出血傾向あり。ワーファリン服用患者、消化性潰瘍、心臓機能不全、肝臓・腎臓障害のある人は医師の許可を。	飲酒の多い人が常用すると胃出血や肝障害のリスクが高い。
	左記の通り
	ピリン疹の説明を
自律神経興奮が病状に悪影響する患者(不整脈、糖尿病、胃潰瘍、緑内障、前立腺肥大による排尿困難、精神疾患等)が常用する場合は医師の許可を。	
緑内障、前立腺肥大による排尿困難の患者は飲んではいけない。ドライアイ、重度の便秘、ドライバーの他、危険を伴う職業などでは注意が必要。	
排尿困難、緑内障、重度のドライアイ、重度の便秘などの患者は飲んでではない	
前立腺肥大による排尿困難、高血圧、心臓病、甲状腺機能障害、糖尿病、自律神経失調症の患者は服用してはいけない。お茶(タンニン)やカフェインの入った食品との併用摂取は避ける	
甲状腺機能亢進症、心臓病、高血圧、糖尿病、精神疾患患者は避けるか、または医師に相談のこと	
	運転や危険な作業の仕事では眠気に注意。便秘のことは予め伝えておく。依存性あり、連用すべきものではない。特に「小児用シロップ1本飲み」に依存者が多い。
咳が軽い場合は、痰をとまなう咳を無理に止めることは必ずしも好ましくない	
一時的に痰がとて多くなることがあるが、心配はいらない	
一時的に痰がとて多くなることがあるが、心配はいらない	
卵白アレルギーの人は飲んでではない。喘息などアレルギー性の病気のある人もなるべく避けるよう	
ワーファリンなど血栓予防管理中の人は避けるよう	